

## 親愛なるクウェートの友人たちへ ～語学センターの外の部～

京都大学 文学部 言語学専修 村岡静樹  
(平成29年度クウェート政府奨学金留学生)

爽やか120%のムハンマドへ：

食文化をはじめとする湾岸の伝統について多くの知識をいただきました。また、とっておきの博物館にも連れて行ってもらいました。おかげさまで「造船職人」「雨水溜め」「椰子の花穂」など、文化の香りたつマニアックな単語もたくさん覚えました。

日本語クラスのザフラとファジュールとヤーサミンへ：

アラブ世界は日本人にとって、依然として外国のなかでも特に遠い場所でしょう。実際、言語文化から政治体制まで、私には文字通り「異国」の感がありました。鳥や魚の名前から始まって、皆さんとの交流はまるでクウェートの常識の速成講座のようでした。（日本の麦茶はコーヒーが入っているわけではなくて、もともとあの風味ですよ！）

ゲームクリエイター・プログラマーのファイサル・バシャーイル夫妻へ：

いかにもアラブ的な(?)ルールを持つボードゲームの対局を楽しみながら、クウェートの最新事情を話してくれましたね。高校見学の機会はどうとう来ず残念でしたが、クウェートの科目の話題に、教職課程を履修している私は大変興味を持ちました。

今風の兄ちゃんラーシドとウマルへ：

伝統衣装が今でも日常着として愛用されていて、しかも「今日は伝統衣装だけど明日は洋服」というふうに共生しているのが面白いですね。H&Mでディシュダーシャ姿のおじさんがジーンズを選んでいた光景が懐かしいです。

詩人アッバースへ：

バーレーン人の君が夜の噴水で声を潜めて話してくれたとき、クウェートで初めて、生身の人間同士の心の通い合いを感じました。そして工業化学が専門なのに、趣味は詩作。古典に明るく、和歌を訳しあぐねていた私に力を貸してくれましたね。「花の色はうつりにけりな」「わが身ひとつの秋にはあらねど」、詩心のある君でなくては相談できませんでした。押韻して即興詩が詠める才能に憧れます。ところでこちらの人、日本人より、普通の会話に比喻が出てくる頻度が高い気がするけど、気のせい？

唯物論者ユースフへ：

あなたのおかげでなし得た発見といっても、20万字になんなんとするクウェート日記を今読み返すと、もはや何からお伝えすればよいのやら。宗教事情や社会問題をテーマに、徹宵快談すること数度に及びましたね。ここに書けないようなことも含めてアラブ世界の多様な側面を、独特の感性で分析しながら活写してくれたことに感謝しています。フスハーとアーンミーヤの両方に精通したインフォーマン

トとしても一番お世話になりました。

懐かしい食堂の元係員ムスタファーへ：

アラブ社会を一言で評すれば、「行き当たりばったりながら、おおらかで、人間同士の関係が強い社会」ではないでしょうか。時刻表どころか停留所の観念すら希薄な公共バス。呼びとめて減速してくれたところで飛び乗り、降りられそうなところで飛び降りるあのシステム。学食でも係員が堂々とつまみ食いしていますし、業務中に平気で居眠りしますが、ちょっと私の目が充血しているのを見ると心配してその場で「これすごく効くよ！」と目薬をさしてくれましたよね……。お元気ですか。

奥様ご指定の食品ラップを一緒に探して回ったアフマドへ：

どこかクウェート人らしからぬ(?) 雰囲気のアナタからは、近年クウェートがどのような変貌を遂げてきたのか、生活者の実感をもって教えていただきました。書店の少ないこの国で本探しを助けていただいたことにも感謝しています。子ども向けの図鑑、英会話の入門書、谷崎潤一郎、古雑誌などおもしろそうなものを次々買っていたので、スーツケースのほとんどが書籍になってしまいました。

洒落男アブドゥルガッファールへ：

クウェートの国章は「砂漠に駱駝」ではなく「海に船」。この地は海路で世界と結ばれていました。アフリカ出身の君からは、「中東まで来ると、地理的のみならず心理的にもアフリカは近い」ということを学びました。そして極東は地の果てなんでしょうね。君が目を見開いて放った迷言「日本人も米を食べるのか！ 日本人は米を食べないと思ってたよ！」を忘れることはないでしょう。

最初に食堂で話しかけてくれた西アフリカ勢と中央アジア勢へ：

英語を解さない君たち同士がフランス語やロシア語をリンガ・フランカに談笑しているのを見ると（つまり君たちは英語の情報網から独立しているわけで）「私の知っている世界の向こうに、どんな世界が広がっているんだろう」と思わずにはいられませんでした。本当に、21世紀の地球にもまだまだ「世界」はたくさんあるのですね。

眼光するどい某説教師へ：

世界的に異文化理解・多文化共生というお題目が先行するあまり、理解・共生できそうにないものは最初から見ないようにする、知らず知らずのうちに、現代人にはそんな悪癖が染みついてしまっていないでしょうか。外国語で挨拶して、エスニック料理を食べて、……そんな生易しいものではないと思うのです。今後も誠実に異文化に苦勞していきたいと思っています。

バンコクのアッパースへ：

運命とは不思議な巡りあわせで、帰国時トランジットの小旅行でムスリム居住区に迷い込んだ私は、あなたとアラビア語で話し、夕食までごちそうになってしまったのです。クウェートのモスク、タイのモスク、タイの寺院、日本の神社やお寺やその他の信仰の場所。すべて訪れてますます考え込んでしまうのです。クウェートで日本人の信仰について聞かれたとき、なんと答えればよかったのでしょうか。

